

# 変わっている友人に対する児童生徒の反応に 関する比較文化的研究<sup>1</sup>

渡 辺 弘 純・David Crystal<sup>2</sup>・武 勤<sup>3</sup>

(教育心理学研究室)

(平成4年10月12日受理)

## 問 題

日本における「国際化」は、急速に進行している。経済における国際化に限らず、人的な交流が拡大し、話題に事欠かない。外国人労働者やアジア諸国からの留学生の増加も、その一つである。海外旅行や日常の場面での外国人との接触とも関連して、人々の意識における「国際化」も、多様な色彩を帯びつつ進んでいる。このような中で、ベネディクト(1948)以来の日本人論も新たな展開をみせている(青木保『「日本文化論」の変容』, 中央公論社, 1990)。そして、ここ十数年来、多様な人々との「調和的共存」が明確な対応を迫られる社会的問題となってきた。

「調和的共存」の問題は、いわゆる一般社会においてばかりでなく、次元の相違はあるとしても、学校教育の場においても、解決の求められている課題として、従来から存在している問題である。しかし、「いじめ」や「登校拒否」の広がりや、かつての状況とは比較できないほど、この問題の解決を切実なものとしている。文部省の統計でも、登校拒否は、中学生を中心として、小学校高学年を含めて、4万人を超える水準が続いており、今後は、高校生についても調査されることになっている。また、必ずしも対人関係の問題ばかりではないが、高校中退者も11万人を超えるようになっている。

多様な人々との「調和的共存」が問題になっているのは、何もわが国ばかりではない。というより、多民族国家のアメリカ合衆国などでは、はるかに大きな問題なのである。アメリカ合衆国では、南北戦争以来の果てしない黒人の公民権運動の歴史があるばかりでなく、今日において、貧富の格差の増大やマイノリティに対する処遇が深刻な問題になっており、人種や経済的地位を異にする人々の「調和的共存」の問題は、国政の中心的課題の一つとなっている。そして、はるかに自覚的な克服のための取り組みが展開されている。たとえば、「障害をもつアメリカ人法」や具体的施策などのなかにもあらわされている。日本との国民性の相違を反映しているが、乳児死亡率や標準学力テスト結果の地域別・人種別の新聞誌上での公表などにおいて、その格差是正の主張が繰り返し展開されている。学校教育においても、その問題の深刻さ

<sup>1</sup>Children's Reactions to Nontypical Peers-A Japanese-American Comparison. 本研究は、平成3年度文部省科学研究費補助金一般研究C萌芽的研究(課題番号03801023)及び平成4年度文部省科学研究費補助金一般研究C萌芽的研究(課題番号04801032)の助成を受けて行われた研究の一部である。

<sup>2</sup>Department of Developmental Psychology, University of Michigan, U.S.A.

<sup>3</sup>山東省教育委員会・中華人民共和国

ゆえに、多様な人々の交流を促す働きかけや「平等」の教育は大きな比重を持っており、「調和的共存」へ向けての試行が、旺盛に、また、日常的に継続されている。中国においては、近年における「改革」の進行と「一人っ子」政策の推進のなかで、多様な人々の「調和的共存」と友人関係の問題が表面化しようとしている。加えて、最近における民族紛争の激化などにもみられるように、この問題は、世界の各地で、日常的社会的問題となっている。

この研究においては、児童生徒の友人関係が取り上げられるが、最近、再び、日本においても「対人関係」や「友人関係」への急激な関心の高まりがみられる。しかし、一般の対人関係に関する研究は、多数報告されているものの、児童生徒を対象とする友人関係の研究は、戦後しばらくの間の隆盛期以後、必ずしも多数報告されているとはいえない。むしろ、乳幼児期の母子関係などと比較すると、その重要性にも関わらず、非常に少ないといえる。したがって、平成2年度の『青少年白書』(1991)などにおいて、友人関係の特集が組まれることにみられる一般の関心の高さと研究の少なさの落差が際だっているのである。他方、アメリカ合衆国などにおいては、問題の深刻さの反映からか、関心の高まりと比例するように、過去20年間に於いて、児童生徒の友人関係や社会的技能を取り上げる研究の数は、驚くべき増加を示している。これらの研究の多くは、児童期における否定的な友人関係が後の不適応と関連していることを指摘している。また、そこでは、大多数が、「問題のある」「変わった」児童生徒そのものに焦点を当てている。しかし、「変わった」児童生徒に対する「一般の」児童生徒の反応についての情報を与える研究は非常に少ない。

現在計画している児童生徒の友人関係についての総合的長期的研究の特徴の一つは、「変わった」児童生徒にだけではなく、それを受け止める側の児童生徒に焦点があてられていることである。そして、(1)「変わっている」友人に対する「一般の」児童生徒の反応の実態はどのようなものであるか、(2)「一般の」児童生徒が、「変わっている」と定義したり、名づけたりする基準は何であるか、(3)これは、何によってもたらされるのか、児童生徒の共感や役割取得や類別化の技能＝認知的情動的特質の個人差とどのように関連するのか、(4)「相違」や「逸脱」を取り扱うに際して、それぞれの文化や社会はどのような社会的文化的メカニズムを用意しており、それは、児童生徒の反応にどのように結び付くのか、が探求される。第二の特徴は、「変わっている」児童生徒あるいは「変わっている」児童生徒と関わる「一般の」児童生徒の現状への対処（この面の研究は重要）という視点からではなく、その基礎的研究として、個人の水準における人間の発達的基本的問題として捉える視点から、「相違」や「逸脱」の枠組みの形成とこれを処理する方略の活用の方法の展開過程を探求していこうとするところにある。すなわち、小学生から大学生にいたる児童・生徒・学生を対象とした発達の研究として行なわれる。第三の特徴は、日本の児童・生徒・学生を対象とするばかりでなく、アメリカ合衆国や中国でも調査を実施し、比較文化的研究として展開しようとするところにある。児童生徒の友人関係についての国際的比較研究は皆無に近い状況にあるが、このような研究の意義の一つは、次の点にもある。たとえば、日米両国を対比すると、経済的システムや教育あるいは生活程度において高い水準を達成するなどの共通点がある一方、社会構造や民族的多様性などには明白な差異があり、人々の心理的特徴を取り上げても、大きく異なっている。アメリカの異質的、また個別的な文化あるいは人間関係と比較して、日本の文化あるいは人間関係は、同質的単層的であり、グループ志向的である。このような面をみると、アメリカ人は日本人よりも、相違に対する耐性があるとも考えられる。しかし、日本人は、「和」（調和）を重視し、他の人に合わせ

る非常に敏感な感受性を持つともいわれる。このような国民性において対比される日米両国間での比較文化的研究は、比較や対照のための絶好の機会を提供し、相違や逸脱を取り扱う社会的文化的メカニズムの解明のために貢献するものと考えられる。

## 研究の目的と方法

本研究は、以上の総合的長期的研究の一端を担う探索的研究の一部として実施された。ここでは、文献的研究から抽出された、次にあげる6つのタイプの児童生徒に対する「一般の」児童生徒の反応が検討された(附録1・2・3参照)。すなわち、(1)攻撃的(aggressive)、(2)引っ込み思案の、内向的(withdrawn)、(3)運動が不得手な(unathletic)、(4)意地悪な(mean or cruel)、(5)学業不振の(learning disabled)、および(6)貧しい(poor)という特徴において変わっている児童生徒が取り上げられ、このような特徴を持っている児童生徒と、個人の水準において、友人になりたいかどうか、小集団の水準において、学校の行事や活動を一緒にしたいかどうかが問われた。また、このような特徴を持つ児童生徒と回答者の類似性についても問われた。

具体的には、本研究においては、(1)上述の6つのタイプの児童生徒に対する「一般の」児童生徒の反応の発達的变化を明らかにするとともに、性別による相違を検討すること、(2)6つのタイプの児童生徒の「一般の」児童生徒による受容と拒否と、回答する児童生徒の母親の教育年数や兄弟姉妹数との関連を明らかにすること、および(3)6つのタイプの児童生徒に対する「一般の」児童生徒の反応について、日米間で国際比較を行ない、それぞれの文化による相違を抽出すること、が目的とされた。加えて、(4)「一般の」児童生徒による6つのタイプの児童生徒との類似性の認知の、発達の相違、性による相違、および文化による相違の検討を行なうことも目的とされた。

表1. 調査対象者の人数

国名	日 本										米 国					
	一 般					特 殊					一 般					
学年	5		8		11		5		8		5		8		11	
性別	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
人数	34	39	35	37	50	53	39	40	40	40	48	48	44	45	42	42

研究は、日米とも、小学校5学年(第5学年)と中学校2学年(第8学年)および高校2学年(第11学年)の児童生徒を対象に実施された。被調査者は、表1の通りであった。日本における調査は、地方都市の2つの小学校と2つの中学校、および1つの高校で、小学校5学年児童152名、中学2学年生徒152名、および高校2学年生徒103名、合計407名についてなされた。小学校と中学校のうち、1校は一般の(代表的な)学校であり、他の1校は通常社会経済的地位においてより高い家庭からの出身者が通うと考えられている学校である。また、高校は、一般の普通高校であり、特に進学競争の頂点に立つ高校ではないが、将来大学に進学する生徒が多い高校である。アメリカ合衆国の調査は、デトロイト周辺地域の一般の(代表的な)小学校、中学校、および高校において、第5学年—96名、第8学年—89名、および第11学年—84

名、合計269名についてなされた。

調査は、児童生徒の通学する学校の教室で、集団的に実施された。児童生徒は、配布された質問紙に、各自の回答を書き込む形式で行なわれた。

調査期間は、日本での調査は、1991年10月から11月にかけて、アメリカ合衆国での調査は、1991年4月から6月にかけて、それぞれ実施された。

### 「変わっている」児童生徒に対する「一般の」児童生徒の反応

個人的水準と小集団事態の2つの事態における、6つのタイプの児童生徒に対する「一般の」児童生徒の反応を、7件法でとらえて得点化し、国別、学年別、性別に示したのが、表2である。得点が高いほど、「変わっている」児童生徒を受容する傾向が大きいと解される。なお、日本の資料については、一般と特殊を合わせた全体について示した。

表2. 6つのタイプの児童生徒に対する「一般の」児童生徒の反応

国 名	日 本						米 国					
	5		8		11		5		8		11	
学 年												
性 別	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
人 数 N	73	78	75	77	50	53	47	48	43	43	42	42
攻撃的 M	3.08	2.86	2.81	3.10	3.42	3.17	2.70	3.04	3.63	2.74	2.79	2.76
個 人 SD	1.64	1.37	1.44	1.39	1.06	1.02	1.67	1.85	1.71	1.26	1.34	1.11
攻撃的 M	2.77	2.46	2.53	3.00	3.30	2.83	2.57	1.92	2.51	2.21	2.00	1.79
集 団 SD	1.57	1.42	1.45	1.51	1.17	1.06	2.07	1.41	1.81	1.39	1.50	.99
内向的 M	3.40	4.10	3.77	3.73	3.88	3.83	3.98	4.79	2.88	3.67	3.38	3.98
個 人 SD	1.96	1.59	1.62	1.62	1.05	1.24	2.32	1.77	1.63	1.39	1.57	1.78
内向的 M	3.41	3.91	3.51	3.77	3.80	3.66	4.66	5.00	3.28	3.28	3.55	3.67
集 団 SD	1.86	1.58	1.51	1.50	.92	1.20	1.93	1.98	1.81	1.34	1.38	1.80
運 動 M	3.84	4.05	3.87	4.26	4.10	4.30	4.40	4.44	3.42	3.98	4.07	4.33
個 人 SD	1.66	.97	1.32	1.12	.83	.74	1.83	1.79	1.37	1.17	.96	1.30
運 動 M	3.44	3.76	3.88	4.13	4.20	4.09	4.23	4.32	3.30	3.74	3.83	4.26
集 団 SD	1.62	1.00	1.24	1.19	.89	.96	1.82	1.88	1.44	1.33	1.17	1.29
意地悪 M	1.93	1.41	2.01	1.68	2.32	1.85	1.96	1.40	3.60	2.05	3.24	2.24
個 人 SD	1.62	1.01	1.31	1.05	1.42	1.14	1.65	.99	1.94	1.35	1.72	1.62
意地悪 M	1.92	1.56	2.01	1.92	2.26	1.94	1.70	1.27	2.16	1.65	2.86	1.95
集 団 SD	1.59	1.21	1.28	1.34	1.21	1.20	1.37	.64	1.61	1.10	1.61	1.45
学 業 M	4.08	3.76	3.95	4.17	4.30	4.26	4.26	4.31	3.86	3.56	4.07	4.48
個 人 SD	1.36	1.38	1.48	1.14	.96	.68	1.55	1.78	1.34	1.24	1.10	1.35
学 業 M	3.60	3.56	3.81	4.16	4.24	4.36	3.19	3.25	2.60	2.28	3.12	3.21
集 団 SD	1.46	1.32	1.36	1.06	.79	.70	2.02	1.93	1.62	1.25	1.42	1.68
貧 困 M	3.42	3.47	3.69	3.88	4.08	4.09	3.70	4.63	2.81	3.81	3.52	4.00
個 人 SD	1.69	1.44	1.36	1.32	.89	.90	1.74	1.89	1.45	.97	1.03	1.38
貧 困 M	3.26	3.50	3.83	3.94	4.16	4.25	3.96	4.25	3.00	3.98	3.98	4.21
集 団 SD	1.60	1.24	1.37	1.32	.81	.72	1.62	1.74	1.60	.98	1.01	1.42

### 1) 「攻撃的な」児童生徒に対する反応について

「Aさんは、いつも、だれもこわくないといっています。Aさんは、よく、他の子と言い争いをしたり、ケンカをしたりします。」「あなたはAさんのような人と友だちになりたいですか。」

(個人水準)に対する反応を、「絶対なりたくない」(1点)から「とてもになりたい」(7点)までの7件法で評定させた結果の得点について、国×学年×性の3要因の分散分析を行なった。

国別による差、学年差、性差は認められなかったが、国別と学年の交互作用 ( $F=3.57$ ,  $df=2,659$ ,  $P<.05$ ) と国×学年×性の交互作用 ( $F=5.37$ ,  $df=2,659$ ,  $P<.01$ ) に有意差がみられた。すなわち、前者については、日本では、5学年と8学年がほぼ同様に、11学年で高い得点になるのに対して、米国では、8学年が高い得点になること、後者については、日本では、11学年男子が高得点を示すのに対して、米国では、8学年男子が高得点を示していることの反映であると考えられる。

「あなたは、Aさんのような人と一緒に、学校の行事や活動をすることについて、どのように感じますか。」(集団事態)に対する反応を、「絶対したくない」(1点)から「とてもしたい」(7点)までの7件法で評定させた結果の得点について、国別と学年別と性別の3要因の分散分析をしたところ、国による差 ( $F=30.07$ ,  $df=1,659$ ,  $P<.01$ )、性差 ( $F=4.29$ ,  $df=1,659$ ,  $P<.05$ )、および国×学年の交互作用 ( $F=4.87$ ,  $df=2,659$ ,  $P<.01$ ) に有意差が認められた。すなわち、日本の方が米国より高得点であること、女子より男子の方が高得点であること、および、日本では、学年の上昇とともに高くなるのに対して、米国では、11学年で低くなっていることが示されている。

### 2) 「内向的な」児童生徒に対する反応について

「Bさんは、はずかしがりやで、他の子としゃべらない子です。他の子が一緒におもしろいことを話したり、遊んだりしているときに、Bさんは、仲間に入るのを恐がっているかのように、よく一人離れて、部屋の隅にいます。」「あなたは、Bさんのような人と友だちになりたいですか。」(個人水準)に対する反応を、7件法で評定させた得点について、国×学年×性の3要因の分散分析をしたところ、学年差 ( $F=5.79$ ,  $df=2,659$ ,  $P<.01$ )、性差 ( $F=12.34$ ,  $df=1,659$ ,  $P<.01$ )、国×学年の交互作用 ( $F=6.18$ ,  $df=2,659$ ,  $P<.01$ )、および国×性の交互作用 ( $F=3.95$ ,  $df=1,659$ ,  $P<.05$ ) に有意差が認められた。すなわち、5学年が高く、8学年が低いこと、男子より女子の方が高いこと、日本では学年による変化が顕著でないが、米国では5学年が高く8学年で低くなること、および、日本では性差が顕著でないが、米国では性差が大きく、女子の方が男子よりかなり高いこと、がそれぞれ示されている。

「あなたは、Bさんのような人と一緒に、学校の行事や活動をすることについて、どのように感じますか。」(集団事態)に対する反応を7件法で評定させた得点について、国×学年×性の3要因の分散分析をしたところ、学年差 ( $F=13.42$ ,  $df=2,659$ ,  $P<.01$ ) と、国×学年の交互作用 ( $F=13.76$ ,  $df=2,659$ ,  $P<.01$ ) に有意差が認められた。他、国による差 ( $F=3.22$ ,  $df=1,659$ ,  $P<.05$ ) に傾向がみられた。すなわち、5学年が高く、8学年が低いこと、日本では学年差があまりないのに対して、米国では5学年から8学年への低下が顕著であること、および、日本より米国の方が高い傾向のあることが示されている。いずれも、これらは、米国の5学年における高さが影響している。

### 3) 「運動が不得手な」児童生徒に対する反応について

「Cさんは、スポーツに興味がなく、チームでするスポーツが苦手です。Cさんは、走るのが遅い子です。ボールを受け損なったり、バレーボールのサーブを返そうとして失敗することもありました」「あなたは、Cさんのような人と友だちになりたいですか。」(個人水準)に対する反応を、7件法で評定させた得点について、国×学年×性の3要因の分散分析をしたところ、学年差 ( $F=3.92$ ,  $df=2,659$ ,  $P<.05$ ), 性差 ( $F=7.07$ ,  $df=1,659$ ,  $P<.01$ ), および国×学年の交互作用 ( $F=5.46$ ,  $df=2,659$ ,  $P<.01$ ) に有意差が認められた。すなわち、8学年が低いこと、男子より女子が高いこと、および、日本では学年とともに次第に高くなるのに対して、米国では5学年で高く、8学年のみが低いこと、が示された。

「あなたは、Cさんのような人と一緒に、学校の行事や活動をする事について、どのように感じますか。」(集団事態)に対する反応を、7件法で評定させた得点について、国×学年×性の3要因の分散分析をしたところ、個人水準と同様、学年差 ( $F=3.20$ ,  $df=2,659$ ,  $P<.05$ ), 性差 ( $F=4.86$ ,  $df=1,659$ ,  $P<.05$ ), および国×学年の交互作用 ( $F=10.09$ ,  $df=2,659$ ,  $P<.01$ ) に有意差が認められた。すなわち、8学年で低くなること、男子より女子の方が高いこと、および、日本では学年とともに高くなるのに対して、米国では、5学年で高く、8学年で低いことが示されている。

### 4) 「意地悪な」児童生徒に対する反応について

「Dさんは、他の子にいじわるしたり、からかったりするのが好きです。また、Dさんは、テストの前に、他の子の教科書を隠したり、他の子の座席にピンを置いたりするような悪いいたづらをします。」「あなたは、Dさんのような人と友だちになりたいですか。」(個人水準)に対する反応を、7件法で評定させた得点について、国×学年×性の3要因の分散分析をしたところ、国による差 ( $F=24.00$ ,  $df=1,659$ ,  $P<.01$ ), 学年差 ( $F=17.48$ ,  $df=2,659$ ,  $P<.01$ ), 性差 ( $F=43.51$ ,  $df=1,659$ ,  $P<.01$ ), 国×学年の交互作用 ( $F=6.48$ ,  $df=2,659$ ,  $P<.01$ ), および国×性の交互作用 ( $F=7.10$ ,  $df=1,659$ ,  $P<.01$ ) に有意差が認められた他、国×学年×性の交互作用に傾向がみられた。すなわち、全般に低い得点であったが、日本より米国の得点が高いこと、学年の上昇とともに高くなること、女子より男子の方が高いこと、日本では学年とともに漸次高くなるが、米国では5学年から8学年にかけて急に高くなること、日本では性差が相対的に小さいが、米国では男子が女子よりはるかに高いこと、が示されている。また、日本では男女ともに学年とともに高くなるが、米国では、女子については日本の変化と類似しているものの、男子については8学年で急に高くなり、11学年ではむしろ低下するという傾向もみられた。

「あなたは、Dさんのような人と一緒に、学校の行事や活動をする事について、どのように感じますか。」(集団事態)に対する反応を、7件法で評定させた得点について、国×学年×性の3要因の分散分析をしたところ、学年差 ( $F=12.06$ ,  $df=2,659$ ,  $P<.01$ ) と性差 ( $F=16.85$ ,  $df=1,659$ ,  $P<.01$ ) に有意差が認められた他、国×学年の交互作用と国×性の交互作用に傾向がみられた。すなわち、学年とともに得点が高くなること、および女子より男子の方が高いことが示されている。また、日本では、少しずつ学年とともに高くなるのに対して、米国の変化の幅が大きい傾向や、日本より米国において性差が顕著である傾向もみられた。

### 5) 「学業不振の」児童生徒に対する反応について

「Eさんは、学校の授業についていくのが、大変な子です。Eさんは、授業中、先生が教えていることを、ほとんど理解することができません。Eさんは、いつも、テストで悪い点をとっています。」「あなたは、Eさんのような人と友だちになりたいですか。」(個人水準)に対する反応を、7件法で評定させた得点について、国×学年×性の3要因の分散分析をしたところ、学年差 ( $F=4.48$ ,  $df=2,659$ ,  $P<.05$ ) と国×学年の交互作用 ( $F=3.85$ ,  $df=2,659$ ,  $P<.05$ ) に有意差が認められた。すなわち、8学年が低く、11学年が高いこと、および、日本においては学年とともに高くなるのに対して、米国では8学年のみが低いことが示されている。

「あなたは、Eさんのような人と一緒に、学校の行事や活動をすることについて、どのように感じますか。」(集団事態)に対する反応を、7件法で評定させた得点について、国×学年×性の3要因の分散分析をしたところ、国による差 ( $F=80.49$ ,  $df=1,659$ ,  $P<.01$ )、学年差 ( $F=7.25$ ,  $df=2,659$ ,  $P<.01$ )、および国×学年の交互作用 ( $F=9.46$ ,  $df=2,659$ ,  $P<.01$ ) に有意差が認められた。すなわち、日本の方が米国よりはるかに高いこと、11学年が高く、8学年が低いこと、および、日本では学年とともに次第に高くなるのに対して、米国では8学年が低いこと、が示されている。

### 6) 「貧しい」児童生徒に対する反応について

「Fさんの家には、あまりお金がありません。ときどき、Fさんは、十分に食事をとっていないように見えるときもあります。Fさんの服は古くて、Fさんにピッタリ合っていない。」「あなたは、Fさんのような人と友だちになりたいですか。」(個人水準)に対する反応を、7件法で評定させた得点について、国×学年×性の3要因の分散分析をしたところ、学年差 ( $F=3.94$ ,  $df=2,659$ ,  $P<.05$ )、性差 ( $F=15.80$ ,  $df=1,659$ ,  $P<.01$ )、国×学年の交互作用 ( $F=11.35$ ,  $df=2,659$ ,  $P<.01$ )、および国×性の交互作用 ( $F=10.42$ ,  $df=1,659$ ,  $P<.01$ ) に有意差が認められた。すなわち、8学年が相対的に低いこと、男子より女子の方が高いこと、日本では学年とともに高くなるのに対して、米国では5学年が高く、8学年が低いこと、および、日本では性差が小さいのに対して、米国では性差が大きく、女子がかなり高いこと、が示された。

「あなたは、Fさんのような人と一緒に、学校の行事や活動をすることについて、どのように感じますか。」(集団事態)に対する反応を、7件法で評定させた得点について、国×学年×性の3要因の分散分析をしたところ、学年差 ( $F=7.45$ ,  $df=2,659$ ,  $P<.01$ )、性差 ( $F=9.15$ ,  $df=1,659$ ,  $P<.01$ )、および国×学年の交互作用 ( $F=9.88$ ,  $df=2,659$ ,  $P<.01$ ) に有意差が認められた他、国×性の交互作用に傾向がみられた。すなわち、11学年が高いこと、男子より女子の方が高いこと、および、日本では学年とともに高くなるのに対して、米国では5学年と11学年がほぼ同様で、8学年が低いこと、が示された。また、日本より米国において性差が大きく、米国女子の得点が高い傾向もみられた。

## 母親の教育年数と「変わっている」児童生徒に対する反応

母親が何年間学校へ通ったか(母親の教育年数)を聞き、これによる児童生徒の反応の相違

を検討しようとして、教育年数を12年以下（短）と13年以上（長）に大別した。日本の資料について示したのが表3であり、米国の資料を示したのが表4である。なお、高校生においては、13年以上の資料が少ないため問題も残る。日本の高校生については、統計的検討の対象から除外した。6つのタイプの児童生徒に対する反応について、個人的水準と集団事態のそれぞれについて、母親の教育年数別、学年別、および性別の3要因の分散分析をして検討した。

### 1) 日本の児童生徒の反応の母親の教育年数による相違

「攻撃的な」児童生徒に対する反応については、個人水準では、教育年数の高低差（ $F = 4.21$ ,  $df = 1, 252$ ,  $P < .05$ ）と教育年数×性の交互作用（ $F = 4.91$ ,  $df = 1, 252$ ,  $P < .05$ ）に有意差が認められた。すなわち、教育年数が長いと得点が高いこと、および、この教育年数の効果は男子についてみられることが示されている。集団事態では、学年×性の交互作用（ $F = 3.99$ ,  $df = 1, 252$ ,  $P < .05$ ）が有意で、教育年数差に傾向がみられた。すなわち、5学年では男子が高く、8学年で女子が高いこと、および、教育年数が長いと得点も高い傾向のある

表3. 母親の教育年数の相違と6つのタイプの児童生徒に対する日本の児童生徒の反応

教育年数	12 年 以 下						13 年 以 上					
	5		8		11		5		8		11	
学 年	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
性 別	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
人 数 N	23	37	37	28	43	37	34	31	30	40	3	12
攻撃的 M	2.39	2.81	2.59	3.04	3.37	3.22	3.50	2.81	3.03	2.98	—	3.25
個 人 SD	1.41	1.47	1.36	1.48	.92	1.04	1.56	1.38	1.43	1.29	—	.83
攻撃的 M	2.52	2.32	2.41	2.82	3.28	2.89	3.00	2.58	2.63	3.13	—	2.75
集 団 SD	1.41	1.36	1.44	1.49	1.19	1.09	1.63	1.60	1.45	1.57	—	1.01
内向的 M	3.22	3.81	3.73	3.57	3.93	3.97	3.92	4.35	3.93	3.75	—	3.83
個 人 SD	1.72	1.66	1.57	1.72	1.09	1.28	2.12	1.47	1.69	1.61	—	.90
内向的 M	3.35	3.89	3.32	3.64	3.81	3.76	3.76	3.97	3.77	3.80	—	3.75
集 団 SD	1.27	1.48	1.47	1.52	.92	1.17	2.16	1.67	1.59	1.42	—	1.16
運 動 M	3.61	4.19	3.76	4.04	4.09	4.35	3.88	4.06	4.10	4.45	—	4.33
個 人 SD	1.31	1.04	1.36	1.24	.88	.67	1.81	.88	1.25	.92	—	.85
運 動 M	3.26	3.81	3.73	3.93	4.16	4.14	3.68	3.81	4.03	4.30	—	4.08
集 団 SD	1.19	.86	1.03	1.10	.91	.93	1.74	1.15	1.43	1.05	—	1.11
意地悪 M	1.22	1.35	1.89	1.68	2.30	1.95	2.24	1.61	2.17	1.70	—	1.67
個 人 SD	.66	.85	1.20	1.17	1.46	1.23	1.83	1.26	1.49	1.03	—	.94
意地悪 M	1.62	1.65	1.84	1.82	2.21	2.08	2.03	1.65	2.17	2.05	—	1.67
集 団 SD	1.06	1.17	1.03	1.23	1.21	1.32	1.64	1.40	1.55	1.48	—	.85
学 業 M	3.87	3.43	3.97	4.07	4.42	4.30	4.18	4.10	4.13	4.15	—	4.25
個 人 SD	1.36	1.59	1.50	1.25	.90	.73	1.40	1.09	1.38	1.09	—	.60
学 業 M	3.26	3.59	3.89	4.14	4.35	4.38	3.94	3.52	3.87	4.13	—	4.42
集 団 SD	1.22	1.42	1.35	1.03	.68	.71	1.70	1.19	1.34	1.19	—	.76
貧 困 M	3.48	3.41	3.35	3.96	4.09	4.30	3.50	3.52	4.03	3.80	—	3.58
個 人 SD	1.79	1.78	1.34	1.30	.71	.83	1.67	1.13	1.38	1.31	—	.95
貧 困 M	3.65	3.65	3.49	3.86	4.19	4.35	3.32	3.42	4.20	4.00	—	4.00
集 団 SD	1.76	1.55	1.24	1.22	.58	.74	1.53	.91	1.51	1.40	—	.71



表4. 母親の教育年数の相違と6つのタイプの児童生徒に対する米国の児童生徒の反応

教育年数	12年以下						13年以上					
学年	5		8		11		5		8		11	
性別	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
人数 N	25	28	29	29	30	30	17	11	8	8	8	8
攻撃的 M	2.36	3.32	3.24	2.76	2.63	2.70	3.06	3.55	4.50	2.13	2.88	2.50
個人 SD	1.41	1.83	1.50	1.36	1.25	1.04	1.76	1.83	2.18	.60	1.62	1.12
攻撃的 M	2.68	1.71	2.07	2.31	1.90	1.70	2.35	2.27	3.50	1.25	2.25	1.63
集団 SD	2.17	1.13	1.44	1.39	1.45	.86	1.78	1.54	2.45	.43	1.71	1.32
内向的 M	3.72	4.57	2.62	3.55	3.47	3.83	4.06	5.09	4.00	3.63	3.25	4.13
個人 SD	2.44	1.55	1.45	1.50	1.65	1.88	2.04	2.02	1.87	.86	1.39	1.69
内向的 M	4.20	4.79	3.21	3.10	3.50	3.23	5.29	4.64	3.75	3.75	3.75	4.88
集団 SD	2.06	1.93	1.81	1.32	1.26	1.75	1.40	2.06	1.92	.97	1.39	1.54
運動 M	4.28	4.29	3.41	3.93	4.13	4.23	4.35	4.82	4.00	4.50	4.25	4.63
個人 SD	1.73	1.63	1.30	1.11	.96	1.38	2.00	1.80	1.50	1.22	.43	1.22
運動 M	4.12	4.25	3.31	3.66	3.83	4.20	4.06	4.18	3.88	4.25	4.00	4.63
集団 SD	1.86	1.74	1.32	1.49	1.24	1.35	1.76	2.08	1.62	.66	.50	1.22
意地悪 M	1.84	1.36	3.41	2.17	3.40	2.13	2.18	1.82	4.38	1.38	2.88	2.50
個人 SD	1.76	.85	1.77	1.39	1.78	1.78	1.58	1.47	2.34	.70	1.62	1.12
意地悪 M	1.56	1.25	1.79	1.83	2.83	1.93	1.94	1.45	3.50	1.38	3.00	1.63
集団 SD	1.33	.63	1.16	1.18	1.73	1.61	1.43	.78	2.35	.99	1.32	.70
学業 M	4.16	4.46	3.72	3.41	4.03	4.47	4.12	4.00	4.50	3.75	4.13	4.63
個人 SD	1.51	1.61	1.46	1.35	1.11	1.45	1.60	2.04	.87	.43	.60	1.22
学業 M	3.00	3.07	2.31	2.28	2.93	3.27	3.06	3.18	3.38	2.50	3.38	2.63
集団 SD	2.06	1.98	1.51	1.34	1.44	1.84	1.89	2.08	1.93	1.00	.86	1.22
貧困 M	3.60	4.71	2.55	3.76	3.50	3.97	3.65	3.91	3.88	4.00	3.25	4.25
個人 SD	1.79	1.73	1.35	1.04	.92	1.47	1.49	1.68	1.36	.50	.83	1.09
貧困 M	3.64	4.46	2.79	3.90	4.00	4.00	4.18	2.91	4.00	4.13	3.75	4.50
集団 SD	1.65	1.52	1.58	1.12	.89	1.44	1.25	1.38	1.58	.33	.97	1.22

ことが示された。

「内向的な」児童生徒に対する反応については、個人水準において、教育年数差に傾向がみられるにとどまった。すなわち、教育年数が長い方が得点も高い傾向があった。

「運動が不得手な」児童生徒に対する反応については、個人水準では、性差 ( $F=4.72$ ,  $df=1, 252$ ,  $P<.05$ ) が認められ、女子の方が男子より高いことが示された。集団事態では、学年差 ( $F=5.32$ ,  $df=1, 252$ ,  $P<.05$ ) が有意であった他、教育年数差と性差に傾向がみられた。すなわち、5学年より8学年が高いこと、および、教育年数の長い方が得点も高く、女子の方が男子より得点が高い傾向が示されている。

「意地悪な」児童生徒に対する反応については、個人水準についてのみ、教育年数差 ( $F=6.20$ ,  $df=1, 252$ ,  $P<.05$ ) に有意差が認められ、性差に傾向がみられた。すなわち、教育年数の長い方が得点も高いこと、および、女子より男子の方が高い傾向のあることが示された。

「学業不振の」児童生徒に対する反応については、個人水準では、教育年数差に傾向がみられ、教育年数の長い方が得点も高い様子が観察された。集団事態では、学年差 ( $F=6.42$ ,

df = 1,252,  $P < .05$ ) が有意であり、8 学年の得点が 5 学年より高いことが示された。

「貧しい」児童生徒に対する反応については、個人水準では、学年差に傾向があり、8 学年の得点が 5 学年より高い様子がみられた。集団事態では、学年差 ( $F = 4.44$ , df = 1,252,  $P < .05$ ) と教育年数×学年の交互作用 ( $F = 3.87$ , df = 1,252,  $P < .05$ ) に有意差が認められた。すなわち、8 学年が 5 学年より高いこと、および、この学年差は教育年数が長い場合にみられることが示された。

## 2) 米国の児童生徒の反応の母親の教育年数による相違

「攻撃的な」児童生徒に対する反応については、個人水準では、教育年数×性の交互作用 ( $F = 3.99$ , df = 1,219,  $P < .05$ ) と学年×性の交互作用 ( $F = 7.09$ , df = 2,219,  $P < .01$ ) に有意差が認められた。すなわち、男子において教育年数が長い場合に得点が高いこと、および、男子では 8 学年で得点が高く、女子では 5 学年で高いことが示された。集団事態では、性差 ( $F = 7.34$ , df = 1,219,  $P < .01$ ) と教育年数×学年×性の交互作用 ( $F = 4.25$ , df = 2,219,  $P < .05$ ) に有意差が認められた。すなわち、男子の得点が高いこと、および、教育年数が短い場合、男子では学年とともに低下し、女子では 8 学年で高くなるのに対して、教育年数が長い場合には、男子では 8 学年がかなり高く、女子では 5 学年が相対的に高いことを反映している。

「内向的な」児童生徒に対する反応については、個人水準で、学年差 ( $F = 3.83$ , df = 2,219,  $P < .05$ ) と性差 ( $F = 4.80$ , df = 1,219,  $P < .05$ ) に有意差がみられ、5 学年と女子の得点が相対的に高いことが示された。集団事態では、教育年数差 ( $F = 6.39$ , df = 1,219,  $P < .05$ ) と学年差 ( $F = 8.10$ , df = 2,219,  $P < .01$ ) が有意であり、教育年数が長い方が高いこと、および、5 学年で高いことが示された。

「運動が不得手な」児童生徒に対する反応については、個人水準において、教育年数差に傾向があるにとどまった。すなわち、教育年数が長い方が得点が高い様子がみられた。

「意地悪な」児童生徒に対する反応については、個人水準で、学年差 ( $F = 6.82$ , df = 2,219,  $P < .01$ )、性差 ( $F = 19.87$ , df = 1,219,  $P < .01$ )、および学年×性の交互作用 ( $F = 4.15$ , df = 2,219,  $P < .05$ ) が有意であった他、教育年数×学年×性の交互作用に傾向が認められた。すなわち、5 学年の得点が低いこと、男子の得点が高いこと、女子では学年とともに次第に高くなるのに対して、男子では 8 学年で高いこと、および、教育年数が短い場合は、特に男子において、8、11 学年の得点が高く、教育年数が長い場合は、男子では 8 学年が高いのと対照的に女子では 8 学年が低い傾向のあることが示された。集団水準では、学年差 ( $F = 5.00$ , df = 2,219,  $P < .05$ )、性差 ( $F = 16.30$ , df = 1,219,  $P < .01$ )、および教育年数×性の交互作用 ( $F = 4.86$ , df = 1,219,  $P < .05$ ) に有意差が認められた。すなわち、学年とともに得点が高くなること、男子の得点が高いこと、および、特に男子において、教育年数が長い場合の得点が高いことが示された。

「学業不振の」児童生徒に対する反応については、いずれについても、有意差や傾向は認められなかった。

「貧しい」児童生徒に対する反応については、個人水準で、性差 ( $F = 10.08$ , df = 1,219,  $P < .01$ ) が有意で、教育年数×学年の交互作用に傾向がみられた。すなわち、女子の得点が高いこと、および、男子では 5 学年で高く、女子では 8 学年で高い傾向のあることが示された。

集団水準では、教育年数×学年×性の交互作用 ( $F=3.76$ ,  $df=2,219$ ,  $P<.05$ ) に有意差が認められた他、教育年数×学年の交互作用と教育年数×性の交互作用に傾向がみられた。すなわち、教育年数が短い場合には、8 学年男子の得点が低い、教育年数が長い場合には、男子は学年とともに得点が低下するのと対照的に、女子は学年とともに上昇すること、および、教育年数が短い場合には 8 学年で得点が低い、長い場合には 5 学年で低い様子や教育年数が短い場合には女子の得点が高い、長い場合には男子の得点が高い様子も観察された。

### 同居している子どもの人数と「変わっている」児童生徒に対する反応

何人の子どもが同居しているか（ここでは、兄弟姉妹数という）を聞き、これによる児童生徒の反応の相違を検討しようとして、子どもの数を 2 人以下（少）と 3 人以上（多）に大別した。日本の資料について示したのが、表 5 であり、米国の資料について示したのが、表 6 であ

表 5. 兄弟姉妹数の多少と 6 つのタイプの児童生徒に対する日本の児童生徒の反応

数	2 人 以 下						3 人 以 上					
	5		8		11		5		8		11	
学 年												
性 別	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
人 数 N	45	43	50	59	32	37	27	34	24	15	16	11
攻撃的 M	3.16	2.65	2.78	3.22	3.41	3.32	3.04	3.09	2.83	2.53	3.56	3.09
個 人 SD	1.69	1.41	1.35	1.32	1.14	.90	1.55	1.29	1.62	1.59	.70	1.16
攻撃的 M	3.00	2.30	2.28	3.08	3.38	2.95	2.41	2.62	3.00	2.67	3.25	2.73
集 団 SD	1.56	1.29	1.27	1.50	1.24	1.06	1.55	1.55	1.66	1.62	.90	.96
内向的 M	3.44	3.91	3.68	3.88	3.81	3.89	3.41	4.35	3.96	3.00	4.00	3.73
個 人 SD	1.80	1.67	1.63	1.67	.68	1.20	2.20	1.47	1.62	1.37	1.58	1.29
内向的 M	3.38	3.70	3.44	3.97	3.75	3.81	3.52	4.18	3.63	2.87	3.94	3.55
集 団 SD	1.75	1.59	1.54	1.51	.66	1.16	2.06	1.54	1.47	1.26	1.30	1.23
運 動 M	3.76	4.07	3.86	4.31	4.13	4.35	3.96	4.03	3.88	4.13	4.06	4.18
個 人 SD	1.54	1.09	1.30	1.17	.65	.67	1.88	.82	1.39	.96	1.14	.72
運 動 M	3.44	3.58	3.76	4.20	4.25	4.08	3.44	3.97	4.13	4.00	4.13	4.09
集 団 SD	1.53	.97	1.24	1.13	.83	1.05	1.79	1.01	1.24	1.37	1.05	.67
意地悪 M	1.98	1.33	1.74	1.73	2.19	1.92	1.89	1.53	2.54	1.40	2.56	1.91
個 人 SD	1.69	.71	1.05	1.09	1.26	1.22	1.52	1.29	1.61	.88	1.66	1.00
意地悪 M	1.91	1.51	1.86	2.02	2.13	2.08	1.96	1.65	2.33	1.53	2.50	1.82
集 団 SD	1.50	1.13	1.18	1.41	1.17	1.30	1.75	1.33	1.43	1.02	1.22	.94
学 業 M	3.91	3.70	3.86	4.19	4.22	4.27	4.33	3.82	4.08	4.07	4.50	4.27
個 人 SD	1.05	1.47	1.54	1.19	.89	.72	1.74	1.27	1.35	1.06	1.12	.62
学 業 M	3.71	3.44	3.78	4.15	4.19	4.38	3.40	3.71	3.83	4.13	4.38	4.27
集 団 SD	1.26	1.47	1.35	1.18	.88	.67	1.75	1.10	1.40	.81	.60	.86
貧 困 M	3.53	3.42	3.72	4.00	4.09	4.22	3.30	3.53	3.58	3.40	4.06	3.73
個 人 SD	1.53	1.62	1.40	1.34	.88	.96	1.92	1.19	1.26	1.25	.97	.62
貧 困 M	3.36	3.56	3.82	4.07	4.13	4.27	3.15	3.41	3.79	3.40	4.25	4.09
集 団 SD	1.46	1.39	1.44	1.36	.89	.83	1.46	1.03	1.22	1.14	.66	.29

表6. 兄弟姉妹数の多少と6つのタイプの児童生徒に対する米国の児童生徒の反応

数	2 人 以 下						3 人 以 上					
	5		8		11		5		8		11	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
人 数 N	23	15	19	27	23	19	24	33	21	16	17	19
攻撃的 M	2.65	3.47	3.58	2.63	2.65	2.84	2.75	2.85	3.62	2.94	2.88	2.58
個人 SD	1.63	1.78	1.46	1.25	1.46	.99	1.71	1.84	1.94	1.25	1.18	1.14
攻撃的 M	2.48	2.13	2.16	2.19	2.00	1.68	2.67	1.82	2.62	2.25	2.06	1.79
集団 SD	1.89	1.31	1.60	1.42	1.69	.80	2.23	1.45	1.89	1.35	1.26	1.15
内向的 M	3.91	4.87	3.05	3.70	3.52	3.63	4.04	4.76	2.71	3.63	3.18	4.11
個人 SD	2.12	1.75	1.64	1.27	1.56	1.81	2.49	1.78	1.69	1.58	1.42	1.83
内向的 M	4.35	5.07	3.11	3.22	3.65	3.11	4.96	4.97	3.33	3.38	3.35	4.16
集団 SD	2.12	1.91	1.45	1.40	1.37	1.77	1.67	2.01	2.15	1.22	1.45	1.63
運動 M	4.09	4.53	3.74	4.26	4.00	4.11	4.71	4.39	3.29	3.50	4.12	4.58
個人 SD	1.47	1.86	.96	1.11	1.10	1.37	2.07	1.76	1.58	1.12	.76	1.31
運動 M	4.30	4.93	3.58	4.04	3.78	4.05	4.17	4.03	3.19	3.25	3.88	4.42
集団 SD	1.73	1.84	1.39	1.35	1.14	1.15	1.91	1.83	1.47	1.15	1.23	1.50
意地悪 M	1.65	1.53	3.89	2.15	3.57	2.47	2.25	1.33	3.43	1.88	2.94	1.84
個人 SD	1.31	.88	1.86	1.41	1.72	1.82	1.88	1.03	2.04	1.22	1.70	1.39
意地悪 M	1.52	1.27	2.63	1.93	3.35	2.05	1.88	1.27	1.76	1.19	2.35	1.58
集団 SD	.93	.57	1.56	1.25	1.49	1.79	1.67	.66	1.57	.53	1.61	.88
学業 M	4.00	4.07	4.21	3.56	4.13	4.47	4.50	4.42	3.62	3.56	3.82	4.53
個人 SD	1.47	1.53	1.36	1.26	.74	1.35	1.58	1.88	1.29	1.22	1.38	1.46
学業 M	3.22	2.93	2.89	2.33	3.30	3.21	3.17	3.39	2.29	2.19	2.82	3.16
集団 SD	2.13	1.84	1.89	1.36	1.04	1.99	1.90	1.95	1.28	1.01	1.82	1.46
貧困 M	3.57	5.07	2.89	3.78	3.52	3.84	3.83	4.42	2.81	3.88	3.41	4.05
個人 SD	1.61	1.73	1.37	.99	.88	1.27	1.84	1.92	1.53	.93	1.19	1.57
貧困 M	3.70	4.87	3.16	4.00	3.65	4.00	4.21	3.97	2.86	3.94	4.41	4.26
集団 SD	1.65	1.67	1.81	1.09	.63	1.38	1.55	1.70	1.46	.75	1.24	1.45

る。6つのタイプの児童生徒に対する反応について、母親の教育年数についてと同様の統計的検討を行なった。

### 1) 日本の児童生徒の反応の兄弟姉妹数による相違

「攻撃的な」児童生徒に対する反応については、個人水準では、学年差 ( $F=3.64$ ,  $df=2,381$ ,  $P<.05$ ) が有意であり、11学年の得点が高いことが示された。集団事態では、学年差 ( $F=3.23$ ,  $df=2,381$ ,  $P<.05$ ) とともに、兄弟姉妹数×学年×性の交互作用 ( $F=3.34$ ,  $df=2,381$ ,  $P<.05$ ) に有意差が認められた。すなわち、学年とともに得点が高くなること、および、兄弟姉妹数が少ない場合には、男子では8学年が低くなるのに対して、女子では高くなるなど逆の変化がみられ、兄弟姉妹数が多い場合には、男子では学年に伴って得点の上昇するのに対して、女子ではあまり変化しないこと、が示された。

「内向的な」児童生徒に対する反応については、個人水準についてのみ、学年×性の交互作用 ( $F=3.13$ ,  $df=2,381$ ,  $P<.05$ ) が有意で、男子では5学年で低いのに対して、女子で

は5学年で高く、むしろ8学年で高くなることが示された。

「運動が不得手な」児童生徒に対する反応については、個人水準では、性差に傾向がみられ、女子の得点が男子より高い様子がみられた。集団事態では、学年差 ( $F = 5.32$ ,  $df = 2,381$ ,  $P < .01$ ) が有意で、学年とともに得点が高くなることが示された。

「意地悪な」児童生徒に対する反応については、個人水準で、学年差 ( $F = 3.39$ ,  $df = 2,381$ ,  $P < .05$ ) と性差 ( $F = 12.25$ ,  $df = 1,381$ ,  $P < .01$ ) に有意差が認められた。すなわち、学年とともに得点も高くなっていること、および、男子の得点の高いことが示された。集団事態では、性差 ( $F = 5.09$ ,  $df = 1,381$ ,  $P < .05$ ) が有意で、男子の得点が女子より高いことが示された。

「学業不振の」児童生徒に対する反応については、個人水準では、学年差に傾向がみられ、学年ともに上昇する様子が観察された。集団事態では、学年差 ( $F = 9.34$ ,  $df = 2,381$ ,  $P < .01$ ) が有意で、学年とともに得点が高くなることが示された。

「貧しい」児童生徒に対する反応については、個人水準で、学年差 ( $F = 4.69$ ,  $df = 2,381$ ,  $P < .01$ ) が有意であり、学年とともに得点が高くなることが示された。集団事態でも、学年差 ( $F = 10.80$ ,  $df = 2,381$ ,  $P < .01$ ) が有意で、同様の結果が示された。

## 2) 米国の児童生徒の反応の兄弟姉妹数による相違

「攻撃的な」児童生徒に対する反応については、個人水準では、学年×性の交互作用 ( $F = 3.45$ ,  $df = 2,244$ ,  $P < .05$ ) が有意で、男子では8学年が高く、女子では5学年が高いことが示された。集団事態では、性差に傾向がみられ、男子が女子より高い様子が観察された。

「内向的な」児童生徒に対する反応については、個人水準では、学年差 ( $F = 8.10$ ,  $df = 2,244$ ,  $P < .01$ ) と性差 ( $F = 9.37$ ,  $df = 2,244$ ,  $P < .01$ ) が有意で、5学年の得点が高いこと、および女子の得点が高いことが示された。集団事態では、学年差 ( $F = 18.26$ ,  $df = 2,244$ ,  $P < .01$ ) が有意で、5学年の得点が高いことが示された。

「運動が不得手な」児童生徒に対する反応については、個人水準では、学年差 ( $F = 5.21$ ,  $df = 2,244$ ,  $P < .01$ ) に有意差が認められ、兄弟姉妹数×学年に傾向がみられた。すなわち、8学年が相対的に低いこと、および、兄弟姉妹数の少ない場合には、5学年が多少高いものの学年差はみられないといってもよいが、兄弟姉妹数が多い場合においては、8学年のみが特に低くなっている。集団事態では、学年差 ( $F = 6.04$ ,  $df = 2,244$ ,  $P < .01$ ) が有意で、8学年が低いことが示された。

「意地悪な」児童生徒に対する反応については、個人水準では、学年差 ( $F = 12.66$ ,  $df = 2,244$ ,  $P < .01$ ) と性差 ( $F = 28.54$ ,  $df = 1,244$ ,  $P < .05$ ) が有意であった他、学年×性の交互作用に傾向がみられた。すなわち、5学年が低いこと、男子が高いこと、および、男子では、8学年が高く5学年が低いのに対して、女子では、5学年のみが相対的に低い様子がみられた。集団事態では、兄弟姉妹数の差 ( $F = 7.27$ ,  $df = 1,244$ ,  $P < .01$ )、学年差 ( $F = 8.48$ ,  $df = 2,244$ ,  $P < .01$ )、性差 ( $F = 17.32$ ,  $df = 1,244$ ,  $P < .01$ )、および兄弟姉妹数×学年の交互作用 ( $F = 3.56$ ,  $df = 2,244$ ,  $P < .05$ ) のいずれにも有意差が認められた。すなわち、兄弟姉妹数の少ない方が高いこと、学年とともに高くなること、男子が高いこと、および、兄弟姉妹数が少ない場合には、学年とともに高くなるが、兄弟姉妹数が多い場合には、11学年で多少高くなるが、学年的変化が顕著でないことが示された。

「学業不振の」児童生徒に対する反応については、個人水準では、学年差 ( $F=3.26$ ,  $df=2,244$ ,  $P<.05$ ) が有意で、5 学年が相対的に低いことが示された。集団事態でも、学年差 ( $F=4.77$ ,  $df=2,244$ ,  $P<.01$ ) が有意で、5 学年が低いことが示された。

「貧しい」児童生徒に対する反応については、個人水準で、学年差 ( $F=7.09$ ,  $df=2,244$ ,  $P<.01$ ) と性差 ( $F=18.68$ ,  $df=1,244$ ,  $P<.01$ ) が有意であった。すなわち、5 学年が高く 8 学年が低いこと、および、女子が高いことが示された。集団事態でも、学年差 ( $F=5.42$ ,  $df=2,244$ ,  $P<.01$ ) と性差 ( $F=7.45$ ,  $df=1,244$ ,  $P<.01$ ) が有意で、同様の結果が示された。

### 「変わっている」児童生徒との類似性の認知

6つのタイプの児童生徒について、「一般の」児童生徒がどの程度自分と類似していると考えているか、すなわち、「あなたは、A (B, C, D, E, F) さんと、どのくらい違っていると思いますか」と問い、これに対する回答を、「まったくちがう」(1点)から「とてもにている」(5点)までの5件法で評定させた結果(表7)について、国×学年×性の3要因の分

表7. 「一般の」児童生徒による6つのタイプの児童生徒との類似性の認知

国名	日本						米 国					
	5		8		11		5		8		11	
学年	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
人数 N	73	78	75	77	50	53	47	48	43	43	42	42
攻撃的 M	2.59	2.69	2.17	2.45	2.04	2.28	2.36	2.06	2.60	1.93	2.14	1.95
SD	.96	.82	.84	.81	.80	.71	1.08	.92	.99	.87	.99	.90
内向的 M	1.58	1.91	2.05	1.92	2.32	2.17	1.81	2.56	1.74	1.93	1.95	2.29
SD	.76	1.06	1.04	.82	.95	.93	.84	1.17	1.12	.73	.92	1.08
運動 M	2.14	2.56	2.17	2.44	2.44	2.68	1.96	2.35	1.63	2.30	1.64	2.50
SD	1.09	1.14	1.11	1.04	1.00	.95	.99	1.09	.86	1.05	.81	1.10
意地悪 M	1.85	1.56	1.86	1.69	1.94	1.70	1.89	1.27	2.58	1.60	2.33	1.67
SD	.95	.86	.99	.74	.97	.79	1.19	.49	1.42	.87	1.11	1.13
学業 M	2.19	2.32	2.33	2.61	2.82	2.89	2.09	2.02	2.30	1.88	2.05	2.33
SD	.93	.97	1.11	.86	.89	.66	.99	.95	1.23	1.19	.95	1.13
貧困 M	1.55	1.40	1.79	1.74	2.18	2.06	1.47	1.65	1.37	1.65	1.38	1.55
SD	.74	.58	.80	.73	.71	.71	.82	.85	.61	.74	.62	.82

散分析をして検討した。したがって、得点が高いほど、類似性を感じていることになる。

「攻撃的な」児童生徒に対する反応については、国による差 ( $F=7.64$ ,  $df=1.659$ ,  $P<.01$ )、学年差 ( $F=6.89$ ,  $df=2.659$ ,  $P<.01$ )、および国×性の交互作用 ( $F=17.38$ ,  $df=1.659$ ,  $P<.01$ ) に有意差が認められた他、国×学年の交互作用に傾向がみられた。すなわち、日本の得点が高いこと、学年とともに得点が低下すること、および、日本では男子より女子が高いのと対照的に、米国では女子より男子の方が高いことが示され、加えて、日本において、学年による低下が顕著である様子も観察された。

「内向的な」児童生徒については、学年差 ( $F=3.47$ ,  $df=2.659$ ,  $P<.05$ ), 国×学年の交互作用 ( $F=7.27$ ,  $df=2.659$ ,  $P<.01$ ), および学年×性の交互作用 ( $F=7.69$ ,  $df=2.659$ ,  $P<.01$ ) が有意であり、性差に傾向がみられた。すなわち、11学年が高く8学年が低いこと、日本では学年とともに高くなるのに対して、米国では5学年が高く8学年が低いこと、および、男子では学年とともに高くなるのに対して、女子では5学年が高く8学年が低いことが示され、全体としては女子の得点が高い様子もみられた。

「運動が不得手な」児童生徒については、国による差 ( $F=16.82$ ,  $df=1.659$ ,  $P<.01$ ), 性差 ( $F=32.51$ ,  $df=1.659$ ,  $P<.01$ ), および、国×性の交互作用 ( $F=3.92$ ,  $df=1.659$ ,  $P<.05$ ) が有意であった。すなわち、日本の方が米国より高いこと、女子の方が男子より高いこと、および、米国における男子の低さが特徴的であることが示された。

「意地悪な」児童生徒については、学年差 ( $F=5.81$ ,  $df=2,659$ ,  $P<.01$ ), 性差 ( $F=40.72$ ,  $df=1,659$ ,  $P<.01$ ), および国×性の交互作用 ( $F=11.31$ ,  $df=1,659$ ,  $P<.01$ ) に有意差が認められた他、国×学年の交互作用に傾向がみられた。すなわち、5学年が低いこと、男子より女子が低いこと、および米国では性差が大きく、米国男子は比較的高いことが示され、日本では学年変化が少ないのに対して、米国では5学年から8学年の上昇が大きい様子もみられた。

「学業不振の」児童生徒については、国による差 ( $F=27.35$ ,  $df=1,659$ ,  $P<.01$ ) と学年差 ( $F=7.39$ ,  $df=2,659$ ,  $P<.01$ ) が有意であった他、国×学年の交互作用と国×学年×性の交互作用に傾向がみられた。すなわち、日本の方が高いこと、および学年とともに高くなることが示された。また、日本の方がより明確に学年とともに高くなる様子がみられ、日本では男女とも学年とともに高くなるのに対して、米国では男子で8学年が高いのと対照的に女子で8学年が低くなる様子も観察された。

「貧しい」児童生徒については、国による差 ( $F=20.02$ ,  $df=1,659$ ,  $P<.01$ ), 学年差 ( $F=7.38$ ,  $df=2,659$ ,  $P<.01$ ), 国×学年の交互作用 ( $F=13.32$ ,  $df=2,659$ ,  $P<.01$ ), および国×性の交互作用 ( $F=7.30$ ,  $df=1,659$ ,  $P<.01$ ) に有意差が認められた。すなわち、日本の方が高いこと、学年とともに高くなること、日本では学年とともに高くなるが、米国ではむしろ低下するともいえること、および、日本では男子の方が高いが米国では女子の方が高いこと、が示された。

## 「変わっている」児童生徒に対する反応の分類と全般的特徴について

6つのタイプの児童生徒に対する2つの場面（個人水準と集団事態）での反応、すなわち12通りの回答を、日本と米国について、それぞれ因子分析を行なったところ、日米両国とも、共通の項目に負荷が高い2つの因子が抽出された。すなわち、日本については、「学業不振の」、「貧しい」、「運動が不得手な」、および「内向的な」に負荷の高い第1因子（固有値4.34；寄与率36%）と、「意地悪な」と「攻撃的な」に負荷の高い第2因子（固有値1.85；寄与率15%）が、米国については、「運動が不得手な」、「貧しい」、「内向的な」、「学業不振の」に負荷の高い第1因子（固有値3.36；寄与率28%）と「意地悪な」と「攻撃的な」に負荷の高い第2因子（固有値1.56；寄与率13%）が、それぞれ抽出された。表8は、国別に、バリマックス回転後の因子負荷量を示したものである。ここからも一端が解るように、共通点も多いが、日米間で

表8. 「変わっている」諸特徴の因子分析結果（バリマックス回転後の因子負荷量）

国 名 因 子	日 本		米 国	
	第1因子	第2因子	第1因子	第2因子
学業不振の(集団)	737	-121	542	124
貧しい(集団)	737	-090	660	-123
貧しい(個人)	730	-105	693	-192
運動不得手な(個人)	688	-080	746	001
内向的な(集団)	681	-107	527	-172
学業不振の(個人)	678	-142	588	147
運動不得手の(集団)	667	-066	636	-061
内向的な(個人)	648	-107	648	-213
攻撃的な(集団)	199	-647	027	369
攻撃的な(個人)	184	-603	010	458
意地悪な(集団)	093	-829	-014	748
意地悪な(個人)	008	-815	-161	782

微妙な相違が認められる。たとえば、日本においては、2つの因子に明確に区分されるのに対して、米国では相対的にバラついている様子も観察された。

全体として、6つのタイプの児童生徒に対する反応の各項目の平均得点を検討するとき、最高では、日本で4.06、米国で4.12となり、「一般の」児童生徒の多くは、当然のことであるが、「変わっている」児童生徒を必ずしも受容しているとはいえない回答をしていることが解る。6つのタイプの児童生徒に対して、相対的な受容の容易さを、各項目の得点（全体の平均得点）によって示すと、日本については、個人水準の順位と集団事態の順位が完全に一致し、「学業不振の」、「運動が不得手な」、「貧しい」、「内向的な」、「攻撃的な」、「意地悪な」の順序となる。米国については、個人水準では、「運動の不得手な」、「学業不振の」、「内向的な」、「貧しい」、「攻撃的な」、「意地悪な」の順になり、集団事態では、「運動の不得手な」、「内向的な」、「貧しい」、「学業不振の」、「攻撃的な」、「意地悪な」の順になる。

6つのタイプの児童生徒との類似性の認知の高いもの（全体の平均得点の高いもの）から順に示すと、日本では、「学業不振の」、「攻撃的な」、「運動の不得手な」、「内向的な」、「意地悪な」、「貧しい」の順になり、米国では、「攻撃的な」、「学業不振の」、「運動の不得手な」、「内向的な」、「意地悪な」、「貧しい」の順になっており、両国の類似性が認められる。

## 要 約

「攻撃的」、「内向的」、「運動が不得手な」、「意地悪な」、「学業不振の」、「貧しい」の諸特徴において「変わっている」児童生徒に対する「一般の」児童生徒の個人的場面と集団事態の2つの場面における受容と拒否、この受容と拒否と「一般の」児童生徒の母親の教育年数や兄弟姉妹数との関連、および、これらの特徴についての「一般の」児童生徒の自己との類似性の認知の実態を明らかにすることを目的として、日本と米国の小学校5学年（5学年）、中学校2学年（8学年）、および高校2学年（11学年）の児童生徒、合計676名を対象として、質問紙調査が実施された。主要な結果は、次の通りであった。

「攻撃的な」児童生徒の受容について、個人的場面では、特に男子において、日本では、11



学年でより容易になるのに対して、米国では8学年でより容易になる。集団事態では、日本の方が米国より容易であり、日本において学年とともに容易さが増し、また、男子の方が容易である。

「内向的な」児童生徒の受容について、個人的場面では、日本においては、学年差や性差が顕著でないが、米国では、5学年と女子において容易である。集団事態では、日本より米国において容易な傾向があり、日本では学年差があまりないが、米国では5学年でより容易であり、8学年でより困難になる。

「運動が不得手な」児童生徒の受容について、個人的場面と集団事態の2つの場面で、女子がより容易であり、日本においては、学年とともに容易になるのに対して、米国では5学年がより容易で8学年がより困難である。

「意地悪な」児童生徒の受容について、個人的場面では、米国がより容易であり、日本では学年とともに容易になるが、米国では8学年でより容易であり、また、日本では性差が小さいが、米国では男子が女子よりはるかに容易である。集団事態では、日本の学年差や性差より米国の差が大きく、高学年や男子の方がより容易である。

「学業不振の」児童生徒の受容について、個人的場面と集団事態に共通して、日本においては学年とともに容易になるのに対して、米国においては8学年がより困難である。特に集団事態では、日本の方がはるかに容易である。

「貧しい」児童生徒の受容について、個人的場面では、日本において学年とともに容易になるのに対して、米国においては8学年男子でより困難であり、日本において性差が小さいのに対して、米国においては女子が男子よりはるかに容易である。

日本における「変わっている」児童生徒の受容と母親の教育年数の関連については、次のような結果が示された。「攻撃的な」児童生徒の受容について、個人的場面では、男子において母親の教育年数が長いとより容易である。集団事態でも、教育年数が長い方がより容易な傾向がある。同様に、個人的場面で、「内向的な」、「意地悪な」、および「学業不振の」児童生徒の受容について、また、集団事態で、「運動が不得手な」児童生徒の受容について、それぞれ、母親の教育年数が長いとより容易になっている。さらに、「貧しい」児童生徒の受容について、集団事態で、教育年数が長い場合には5学年より8学年がより容易である。

米国における「変わっている」児童生徒の受容と母親の教育年数の関連については、次のような結果が得られた。「攻撃的な」児童生徒の受容について、個人的場面で、男子において教育年数が長い場合に容易である。集団事態で、教育年数が短い場合には、男子において、学年とともに困難になり、女子において、8学年でより容易になり、教育年数が長い場合には、男子では8学年、女子では5学年がより容易である。「内向的な」児童生徒の受容については、集団事態で、「運動が不得手な」児童生徒の受容については、個人的場面で、それぞれ、教育年数が長いほどより容易である。「意地悪な」児童生徒の受容について、個人的場面で、教育年数が短い場合には、特に男子において、8・11学年で容易であり、教育年数が長い場合には、男子では8学年が容易なのに対して、女子では8学年がより困難である。「貧しい」児童生徒の受容について、集団事態で、教育年数が短い場合には、8学年男子で困難であり、教育年数が長い場合には、男子において、学年とともに困難になるのと対照的に、女子では学年とともにより容易になる。

「変わっている」児童生徒の受容と兄弟姉妹数の関連については、母親の教育年数との関連

に比して、あまり顕著な結果は認められなかった。日本においては、「攻撃的な」児童生徒の受容について、集団事態で、兄弟姉妹数が少ない場合には、8学年男子が困難であるのに対して8学年女子が容易になるなど逆の結果がみられ、兄弟姉妹数が多い場合には、男子では学年とともにより容易になるのに対して女子では顕著な変化が認められない。米国においては、「運動が不得手な」児童生徒の受容について、個人的場面で、兄弟姉妹数が少ない場合には、学年差はあまりないが、兄弟姉妹数が多い場合には、8学年のみ困難であること、および、「意地悪な」児童生徒の受容について、集団事態で、兄弟姉妹数が少ない場合には、学年とともに容易になるが、兄弟姉妹数が多い場合には、学年変化が明確でないことが示された。

「変わっている」児童生徒との類似性の認知については、次のような結果が示された。一般に、日本の方が、「攻撃的」や「運動が不得手な」や「学業不振の」や「貧しい」にみられるように、米国より類似性を認知している。日本では、「内向的」や「学業不振の」や「貧しい」の類似性が学年とともに高くなっている。「攻撃的な」は、全く逆の傾向を示している。また、「攻撃的」の類似性は、日本では女子が高く、米国では男子が高いこと、逆に「貧しい」については、日本では男子が高く、米国では女子が高いこと、「運動が不得手な」や「内向的」の類似性が女子において高いこと、および、「意地悪な」の類似性が女子において低く、特に米国男子が高いことなどが示されている。

その他、6つのタイプの「変わっている」特徴は、日米両国に共通して、「学業不振の」・「貧しい」・「運動が不得手の」・「内向的な」というグループと、「意地悪な」・「攻撃的な」というグループの、2群に大別できること、全体として、「変わっている」児童生徒を受容するのが困難な傾向が認められるが、相対的に受容の容易な特徴としては、「学業不振の」や「運動が不得手な」が、受容が困難な特徴としては、「意地悪な」や「攻撃的な」があげられることなどが明らかにされた。

以上、本研究では、質問紙法による調査によって見いだされた事実の報告を中心に記述してきたが、これらの事実の内容を検討して、これらの事実を生み出している機構を解明していくことが、今後の課題となるのはいうまでもない。

附録1. 調査項目 (日本語版)

はじめに (みなさんへ)

この調査(ちょうさ)では、名前(なまえ)を書く必要(ひつよう)がありません。  
 みなさんの回答(かいとう)は、学校の成績(せいせき)とは、まったく関係(かんけい)がありません。この調査用紙(ちょうさようし)を、みなさんの先生やお父さんやお母さんに見せることもありません。ですから、回答(かいとう)について、あまり深(ふか)く考えこんだり、なやんだりしないでください。あなたが思ったとおりに、そのまま答えてください。では、よろしくお願(ねが)います。

あなたは、何歳(なんさい)ですか。  
 ( )歳(さい)

あなたは、男子(だんし)ですか、女子(じょし)ですか。  
 (男・女)

あなたのお母さんは、何年間(なんねんかん)学校へ行きましたか。その年数(ねんすう)に○をつけてください。

大学  
 1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12 1・2・3・4・5+

あなたの家では、あなたをふくめて、今、何人(なんにん)が住(す)んでいますか。

おとな( )人 こども( )人

質問 (しつもん) II

次(つぎ)にあげるのは、みなさんと同(おな)じ年の6人の違(ちが)ったタイプの子どもたちについて、書かれたものです。それぞれの文を読(よ)んで、下の質問(しつもん)に答(こた)えてください。

あなたが、どのように感(かん)じるか、もっとも近(ちか)い答(こた)えを選(えら)んで、それぞれの番号(ばんごう)を○でかこんでください。

1. Aさんは、いつも、だれもこわくない、といっています。Aさんは、よく、他(ほか)の子と言(い)い争(あらそ)いをしたり、ケンカをしたりします。

1) あなたは、Aさんのような人と友だちになりたいですか。

ぜったいに なりたくない		なってもならなくても どちらでもよい		とても なりたくない
1	2	3	4	5
6	7			

2) あなたは、Aさんのような人といっしょに、学校の行事(ぎょうじ)や活動(かっどう)をしたいですか。

ぜったいに したくない		してもしなくても どちらでもよい		とても したい
1	2	3	4	5
6	7			

3) あなたは、Aさんのような人とどのくらい似(に)ていると思いますか。

まったくちがう	ちがう	ちがうともにて いるともいえない	にている	とてもにている
1	2	3	4	5

2. Bさんは、はずかしがりやで、他(ほか)の子とあまりしゃべらない子です。他(ほか)の子が、いっしょにおもしろいことを話(はな)したり、遊(あそ)んだりしているときに、Bさんは、仲間(なかま)に入(はい)るのをこわがっているかのよう  
 に、よく、ひとり離(はな)れて、部屋(へや)のすみにいます。

3. Cさんは、スポーツに興味(きょうみ)がなく、チームとするスポーツが苦手(にがた)です。Cさんは、走(はし)るのが遅(おそ)い子です。ボールを受(う)けそこなったり、バレーボールのサーブを返(かえ)そうとして失敗(しっばい)することもたびたびです。

4. Dさんは、他(ほか)の子にいじわるをしたり、からかったりするのがすきです。また、Dさんは、他(ほか)の子の座席(ざせき)に、押(お)しピンをおいたり、テストの前(まえ)に、他(ほか)の子の教科書(きょうかしょ)をかくしたりするような悪(わる)いいたずらをします。

5. Eさんは、学校の授業(じゅぎょう)についていくのが、大変(たいへん)な子です。Eさんは、授業中(じゅぎょうちゅう)、先生が教(おし)えていることを、ほとんど理解(りかい)することができません。Eさんは、いつも、テストで悪(わる)い点(てん)をとっています。

6. Fさんの家(いえ)には、あまりお金がありません。ときどき、Fさんは、十分(じゅうぶん)に食事(しょくじ)をとっていないように見えるときもあります。Fさんの服(ふく)は古(ふる)くて、Fさんにビックリ合(あ)っていません。

附錄 2. 調查項目 (米語版)

**Introduction**

Your answers on this questionnaire will have no effect on your school grades. This questionnaire will not be shown to your principal, your teachers, or your parents. So, do not think too deeply or worry about your answers. Just respond according to how you truly feel. Thank you very much for your help in this study.

How old are you? \_\_\_\_\_ years old.

Male                  Female

What was the highest level of school your mother completed?

1---2---3---4---5---6---7---8---9---10---11---12                  College  
1---2---3---4---5+

How many people, including yourself, are now living in your house?

(    ) Adults                  (    ) Children

Are you first born, second born, third born....? \_\_\_\_\_

**Part II**

Below are descriptions of six different types of kids your age. Read each description, and then answer the questions that follow. Please circle the number on each scale that comes closest to expressing how you would feel.

1. A is always saying that he/she is not afraid of anybody. A often gets into arguments and physical fights with other kids.

1) Would you want to be friends with someone like A?

Definitely Not                  Wouldn't care one way or the other                  Definitely Yes  
1                  2                  3                  4                  5                  6                  7

2) Would you want to work on a school event or school project with someone like A?

Definitely Not                  Wouldn't care one way or the other                  Definitely Yes  
1                  2                  3                  4                  5                  6                  7

3) How similar do you think you are to someone like A?

completely different                  different                  can't say if I'm different or similar                  similar                  just like A  
1                  2                  3                  4                  5

2. B is shy and seems to have trouble talking to other kids. When other kids are joking around or playing together, B often goes off by him/herself to a corner of the room, as if afraid to join in with the others.

3. C is not interested in sports and is not very good at team sports. C is a slow runner. He/she often fumbles when trying to catch a ball or return a volleyball serve.

4. D likes to tease and make jokes about kids. D also plays mean tricks like putting tacks on kids' seats, or hiding kids' textbooks before a test.

5. E has a hard time learning what is taught in school. E understands very little of what the teacher teaches in class. E always gets low grades on tests.

6. F's family doesn't have a lot of money. Sometimes F looks as if he/she doesn't get enough to eat. F's clothes are old and don't fit F well.

附錄 3. 調查項目 (中國語版)

关于青少年素质调查的问卷

说明：

1. 答卷人不必书写自己的姓名。
2. 本问卷仅供研究使用，与学习成绩无关，也不向学校、老师和家长公开，因而答卷人不必抱有任何顾虑，尽可按照自己的想法回答。
3. 答卷时务必书写工整，文字规范。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

请填写：

你今年( )岁。

你的性别是( )性。

你的妈妈曾经在学校读过多少年书？请在下列的数字中用“○”圈画出来：

1 · 2 · 3 · 4 · 5 · 6 · 7 · 8 · 9 · 10 · 11 · 12

大学 1 · 2 · 3 · 4 · 5 +

包括您本人在内，全家共有几口人？

全家共有( )人，其中成人( )人，小孩( )人。

问题 II

下列所述 ABCDEF 六位不同类型的人，他们的年龄都与你相同。请阅读下面的短句后，作出回答。请选择与自己的想法最接近的答案，并在表示程度的数字上用“○”画出来。

1. A总是谁也不怕，而且经常同其它同学吵嘴打架。

(1)您愿意同A这样的人交朋友吗？

非常不								非常
愿意								愿意
1	2	3	4	5	6	7		

(2)您愿意同A这样的人一起参加学校的活动吗？

十分							十分不
愿意							愿意
1	2	3	4	5	6	7	

(3)您认为自己与A有多少不同？

完全	基本	也同也	基本	完全
不同	不同	不同	相同	相同
1	2	3	4	5

2. B是一位腼腆羞涩的人，平时很少与其它同学讲话。同学们一起聊天游玩时，B往往不加入到伙伴中去，而是常常独自一人呆在室内。

3. C对体育运动不感兴趣，很少参加集体性的体育活动。C跑得很慢，玩排球时，无论接球、发球和传球都常常失误。

4. D经常欺侮和戏弄同学，喜欢搞恶作剧，经常在同座的位子上放置东西，或在考试前藏同学的课本等。

5. E学习非常吃力，老师在课堂上讲授的内容几乎听不懂，考试成绩一向很差。

6. F家庭生活困难，有时给人一种好像吃不饱饭的样子，经常穿旧而不合体的衣服。